

嫌われがちなクモの魅力を伝えるプログラム実践からみてきたこと

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 加藤 大成

1. 研究背景

私にとって虫[※]たちは友達のような存在であった。幼い頃の私は虫たちを捕まえたり飼育したりして遊んで過ごしていた。

しかし、年を重ねるにつれ虫好きな自分と世間とのずれを感じるようになった。ずれを明確に感じたのは中学生の時だった。ある日、中学校の教室に一匹のクモが迷いこんできて、クラス

の女子が私にクモを窓の外に出すよう依頼してきた。

クモを素手で捕まえ窓の外へ逃がし、女子の方向へ振り返ると、女子から聞こえた声は感謝の声ではなくクモを触った私への拒絶の



教室にいたであろうユウレイグモの仲間

声であった。この頃から私は「虫たちが好きな私は変なのだ」と考えるようになり、虫が大好きであるという気持ちに蓋をするようになった。

だが、せめて自然に囲まれて仕事がしたいと思いアカデミーに入学した。アカデミー入学後、自分が好きなことを思い切り楽しんだり語ったりする人たちに出会って、「好きなことに蓋をしなくてよいのだ」「私も大好きな虫たちの魅力を伝えたい」と思うようになった。また、虫の中でも、あの日拒絶されたクモについて伝えたいと思った。何故ならクモは私にとって魅力的であり、人類にとっても必要不可欠な存在なのに嫌われがちな現状を変えたいと考えたからである。

2. 目的、手法

嫌われがちなクモの魅力を伝える際に必要なポイントを明らかにすることを目的とした。手法としては、クモに関するオリジナルのトークプログラムを試行、改良することを繰り返す中で必要なポイントを見つけていく方法を採用した。

3. 基礎調査

基礎調査①として、KJ法によりクモに対する印象を抽出しグルーピングしたところ、①きらわれがち、②みすごされがち、③軽んじられがち、④恐れられがち、の4つのグループに分類することができた。

次に基礎調査②として、日本人にとってクモがどのような存在なのかを文献調査を通して明らかにした。

クモの伝承はいくつも残っており、夜クモを紙に包んで神棚に上げておくと翌日に貰い物があるという伝承や、クモを紙に包んでタンスに入れておくとお金が

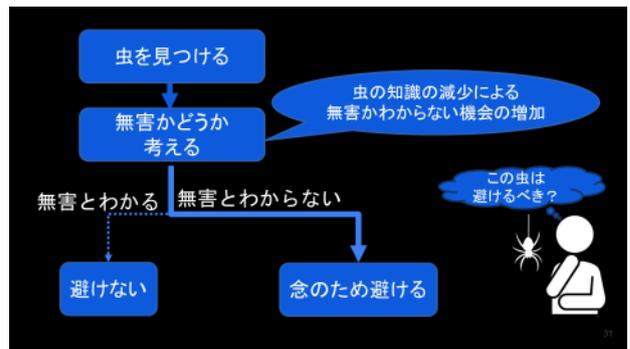
たまるといった伝承は、クモをまるでラッキーアイテムのように扱っている。一方で妖怪の土蜘蛛のように、クモを悪い存在として描いた例も複数存在する。古来から日本人にとってのクモは良い面も悪い面もどちらも備えている存在であった。



出典：『土蜘蛛草子』
妖怪として描かれるクモ

一方、人類は進化の過程で病原体の感染を避けようとする心理を獲得した。虫に対してもこの心理は働き、室内に現れる虫に対してとくに強い拒否反応を示すよう進化した。

更に、近代化と共に人と虫との距離が離れていくと、虫の知識が減少するにつれて病原体を回避しようと虫を避ける心理が強くなっていった。



現代の日本人が虫を避けるプロセス

参考：東京大学大学院農学生命化学研究科・農学部 深野裕也(2021)『なぜ現代人には虫嫌いが多いのか？—進化心理学に基づいた新仮説の提案と検証』

クモの場合も虫と同等のことが起きたと考え、かつてのラッキーアイテム的な良い側面は忘れられ、妖怪のような悪い面と病原体を避ける心理によって嫌われがちな存在となったのではないだろうか。

この2つの基礎研究から日本人がクモを嫌いがちなのは根柢の薄い負のイメージが主な理由であり、クモの魅力を伝えるプログラムを行うことでクモへの意識改善を図ることは十分にできると確信した。

4. 実践

基礎研究を踏まえながら実践を計12回行った。その中から特に印象的であったプログラムを紹介する。

4-1 4月20日 川と山のぎふ自然体験活動のつどい

対象は計8名で、題材はジグモの恋愛、プログラム時間は15分であった。題材にしたジグモは、家の壁や樹木の地際に筒状の巣を作る、身近にいるクモの一種である。

このプログラムではジグモという身近な種にフォーカスしたことが良い方向に働いた。対象者の平均年齢

が高めであったことも影響し、ジグモに関するエピソードがある人が複数おり、そこでクモと参加者との距離を縮めることが出来た。

また、プログラム参加者からの感想として最も多かったのは「君がクモを『この子』『彼』『彼女』と呼んでおり、本当に好きなのだ感じ、話を聞いてみたくなった」というものであった。プログラムを始めるにあたって参加者にクモが好きか聞いた際、好きと答えた方はおらず、普通ないしは嫌いという人たちがばかりであった。愛着のある呼び方をして「好きオーラ」を相手に届けることは非常に有効であると言えるだろう。

4-2 10月20日 河川環境楽園自然発見館

発見館の一角にクモブースを作った上で来訪者に声をかけて解説を行った。題材は複数のクモトピックを用意し、時間は来訪者に合わせて随時行った。



虫好きオーラ全開で解説する様子

このプログラムでは来訪者に標本を見せていたのだが、そこでとある問題が起きた。それは来訪者がクモの標本のどこを見ると面白いかわからず、なんとなく眺めて終わりとなっていたことである。



話の展開に合わせて生体観察も行った

そこで、標本を見せる前にまずクモのぬいぐるみを見せてみることにした。まずはぬいぐるみでクモの大体の形を確認したあと「ぬいぐるいと標本とでどこが違うかな」といったように話を広げていった。すると、来訪者は興味深そうに標本を観察するようになった。

4-3 11月9日～10日 翔楓祭

翔楓祭来訪者を対象に、ジョロウグモを通して見るクモの可能性を題材としたトークプログラムを随時行った。ジョロウグモとは秋口に様々な場所でよく見られる、大きな網をはるカラフルで大きなクモである。



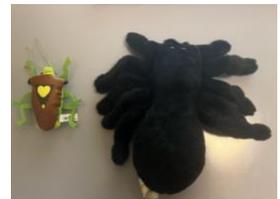
毒々しい見た目のジョロウグモだが、危険性はほぼない

この展示ではジョロウグモとのふれあいブースを用意していたのだが、言葉で安全であることを強調しても来訪者はジョロウグモを触ろうとはしなかった。そこで、まずは自らジョロウグモを手のひらにのせて触れ合うことで、直観的に触っても問題ないことがわかるようにしてみた。すると、明らかに来訪者がジョロウグモを触る確率が上がり、中には「絶対触りたくない」と言っていた子どもが自ら触るようになり、最終的に母親にも触るよう勧める場面もあった。安心できる雰囲気、身をもって作ることが大切だと気付いた。

4-4 11月30日 河川環境楽園自然発見館

発見館のプログラムを受けた親子を対象に、ヒラタグモを題材としたプログラムを25分提供した。ヒラタグモとは、捨てられたガムの跡のような形の巣を家の壁などに作っている、小型だが身近なクモである。

このプログラムではヒラタグモの解説をする際、小さなヒラタグモの話が分かりやすくなるようクモとカメムシ(獲物役)のぬいぐるみを用いた。更に、年末が近づいていたことを利用

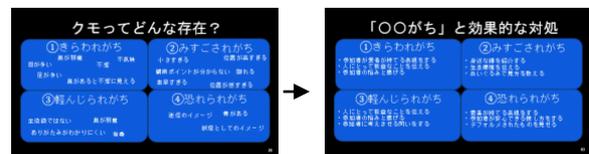


使用したカメムシとクモのぬいぐるみ

して「大掃除の際窓のサッシにこのようにカメムシがいた経験ありませんか?」といったように、多くの人が経験したことのある話題を絡めた。するとアンケート結果にて親子ともにクモがいることの大切さに気付いた旨の回答を得ることが出来た。参加者に自分と関係することなのだ、と強く印象付けることで効果的になると学んだ。

4. 考察

プログラム実践を通して気付いたクモの魅力を伝える際に必要なポイントを、先述したクモの印象の4分類に当てはめて整理することができた。例えば「きらわれがち」な側面については参加者が愛着を持てる表現をすることや人にとって有益なことを伝えることが当てはまる。



クモの「〇〇がち」とその効果的な対処法

また、クモに対するポイントの整理は、ほかの虫においても当てはめることができる。きらわれがちなゴキブリ、みすごされがちなハゴロモ、軽んじられがちなハエ、恐れられがちな毛虫など、彼らに関しても、このポイントを応用することでその魅力を伝えることが出来るのではないだろうか。

5. 今後の展望

4月から私は身近な自然の魅力を伝える施設である河川環境楽園自然発見館に就職する。今回見つけたポイントは、数多あるポイントの氷山の一角である。今回のポイントを大切にしながらも試行錯誤を繰り返していき、様々な虫たちの魅力を伝える為に更なるスキルの上を目指していく。

ⁱ ※虫とは本来、哺乳類、鳥類、魚類以外の小動物の総称だが、ここではアリなどの昆虫の他、ダンゴムシ、クモ、ムカデなどの、身近な節足動物を主に差す。